



Title	日系人学校における父母・生徒・教師のデカセギ観
Author(s)	野崎, 剛毅
Citation	「調査と社会理論」・研究報告書, 24, 105-136
Issue Date	2007-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28293
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_P105-136.pdf



日系人学校における父母・生徒・教師のデカセギ観

野崎剛毅

第1章 日系人学校調査の概要

日本へのデカセギが教育にもたらす影響を、日系ブラジル人たちはどのように捉えているのだろうか。ここでは、ブラジルにある日系人学校で教師と生徒親子を対象として行った調査から、ブラジルに住む日系人のデカセギ観と教育観を明らかにすることを試みる。

第1節 調査校の概要

今回調査を行ったのは、ブラジル・サンパウロ市の郊外にある日系ブラジル人学校（O校）である。2005年にブラジルで調査を行った際に一度訪問し、調査の協力を依頼していた。

O校は、幼稚園から義務教育（8年）までを一貫して行う学校であり、2005年調査時で145人の児童・生徒が在籍していた。ブラジル政府から認可を受けた正規の私立学校であるが、そのカリキュラムは独特であり、ブラジルで通常行われている授業の他に、英語や日本語、日本文化である茶道、書道、生け花などの時間を設けている。これらはO校における必修カリキュラムであり、修得できなかった場合は落第することもある。

O校の制度面における特色として、ブラジルでは珍しい全日制をとっていることが挙げられる。ブラジルの学校は通常半日制で、半日のクラスが一日に何度か入れ替わるシステムを取っている。しかしO校では、上級生では7時から17時まで学校がある。これは、一つにはO校での教育目標ともいえる全人教育を実践するためであるが、それ以外にO校が託児的な機能を担っていることも影響しているようである。

月謝は、中学部で1,100RLほど、小学部で1,030RLほど、幼稚園が950RLほどであるという。父母調査でみた世帯年収（第2章表2-7参照）から考えると決して安くない水準であるように思えるが、校長の話によるとこれでも別の私立学校と比較すると「高くない」そうであり、もっと裕福な家庭はさらに月謝の高い別の私立学校を利用しているのだということであった。

第2節 調査の概要

調査は2006年の8月に行った。すべての父母と4年生以上の児童・生徒、そして教師を対象として調査票を配布した。なお、父母票と教師票は、日系人幼稚園調査（本報告書所収の品川論文参照）で用いたものとはほぼ同一であるが、一部O校からの指摘により文言が変わっている箇所がある。

配布数は、表1-1のように、父母125部、4年生以上の児童52部、教師25部、回収率は父母54.4%、児童61.5%、教師64.0%であった。

なお、児童調査で回収のあったケースは、すべてその父母からも回答を得ている。しかし、兄弟姉妹が5組含まれるため、実際に親子セットで調査票を回収できたのは27家族分である。

表1-1 回収率

	配布数	回収数	回収率
父母調査	125	68	54.4%
児童調査	52	32	61.5%
教師調査	25	16	64.0%

第2章 デカセギと教育に対する父母の意識

第1節 父母の属性と教育意識

はじめに、〇校に子どもを預けている父母たちの背景と、デカセギや教育に対する意識を確認しておこう。なお、デカセギに対する意識は自身がデカセギを経験しているかどうかによって大きく影響されることが予想される。そこで、本章ではデカセギ経験の有無によって意識がどのように異なるかをみていくことにする。

本調査の協力を得た68人の回答者の内、母親の回答者が全体の52.9%と多くなっている（表2-1）。続いて父親が38.2%であり、祖父、祖母による回答はなかった。また、デカセギの経験を聞いてみると、全体の19.1%にあたる13人が日本へのデカセギを経験している。

家族数はデカセギ経験有で平均3.6人、未経験家族で平均4.1人となっている（表2-2）。経験家族では3人家族が、未経験家族では4人家族が多くなっており、最大では7人家族が2世帯あった。回答者の年齢は聞いていないものの、デカセギ未経験者は日系2世が、デカセギ経験者は日系3世が多いことから（表2-3）、経験者の方が年齢が若い可能性が指摘できるだろう。

回答者の社会階層をみると、まず最終学歴においてデカセギ経験者と未経験者の間に大きな差が表れている（表2-4）。未経験者の最終学歴は大学、大学院が54人中45人と83.3%を占めている。それに対して経験者は大学、大学院が合わせて7人（53.9%）と少なくなっている。

表2-1 あなたはデカセギに行ったことがありますか

		度数	パーセント
子の性別	男の子	39	57.4
	女の子	26	38.2
子との関係	父親	26	38.2
	母親	36	52.9
	祖父	0	0.0
	祖母	0	0.0
	その他	2	2.9
デカセギ	ある	13	19.1
	ない	55	80.9
合計		68	100.0

表2-2 あなたは何人家族ですか

	2人	3人	4人	5人以上	平均	合計
デカセギ有	0(0.0)	7(53.8)	4(30.8)	2(15.4)	3.6人	13(100.0)
デカセギ無	1(1.9)	10(18.5)	31(57.4)	12(22.2)	4.1人	54(100.0)

表2-3 日系人ですか

	日系1世	日系2世	日系3世	その他	日系人ではない	合計
デカセギ有	1(8.3)	3(25.0)	6(50.0)	1(8.3)	1(8.3)	12(100.0)
デカセギ無	4(7.4)	29(53.7)	18(33.3)	1(1.9)	2(3.7)	54(100.0)

また、主に家計を支えている人の職業を聞くと（表2-5）、デカセギ経験者の家庭では事務職と管理職がそれぞれ23.1%と多くなっている。一方でデカセギ未経験者の家庭では専門・技術職が31.5%と最も多く、ついで管理職が24.1%となっている。この職業の違いは世帯月収の差に如実に反映されているようであり、両者の間には平均すると3倍近い月収の開きがある（表2-7）。デカセギ経験者の家庭では月収3,000～7,500RLの家庭が半数近くを占めており、また12,500RL以上の月収がある家庭はない。それに対し、デカセギ未経験者の家庭では7,500～12,500RLの収入のある世帯が32.6%と最も多くなっている。さらに、デカセギ経験者家庭では存在しない、収入12,500RL以上の世帯も、未経験者家庭では18世帯と41.9%存在している。その結果、平均月収はデカセギ経験者家庭の3,729.4RLに対してデカセギ未経験者家庭では10,725.3RLとなっている。

しかし、だからといって当該学校の父母のうち、デカセギを経験している家庭の社会階層が低いというわけでは決してない。ブラジル国勢調査によると、2000年のブラジルにおける都市部の平均月収は854RLであるという¹⁾。それと比較すると、デカセギ経験者家庭でも平均月収は都市部平均の4倍以上となっており、当該校の社会階層の高さが際だっていることがわかる。

表2-4 最終学歴

	小学校	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	合計
デカセギ有	1(7.7)	0(0.0)	0(0.0)	1(7.7)	4(30.8)	5(38.5)	2(15.4)	13(100.0)
デカセギ無	0(0.0)	0(0.0)	5(9.3)	2(3.7)	2(3.7)	33(61.1)	12(22.2)	54(100.0)

表2-5 主な家計支持者の職業

	事務職	販売職	専門・技術職	管理職	農林漁業	サービス	学生	その他	合計
デカセギ有	3(23.1)	1(7.7)	0(0.0)	3(23.1)	0(0.0)	0(0.0)	1(7.7)	5(38.5)	13(100.0)
デカセギ無	3(5.6)	7(13.0)	17(31.5)	13(24.1)	1(1.9)	1(1.9)	0(0.0)	12(22.2)	54(100.0)

表2-6 主な家計支持者の従業上の地位

	経営者・役員	常時雇用の一般従業員	パート、臨時	自営業主	家族従業員	その他	合計
デカセギ有	3(33.3)	3(33.3)	0(0.0)	2(22.2)	0(0.0)	1(11.1)	9(100.0)
デカセギ無	13(38.2)	7(20.6)	2(5.9)	5(14.7)	1(2.9)	6(17.6)	34(100.0)

表2-7 世帯年収

	3000RL未満	3000～7500RL	7500～12500RL	12500～20000RL	25000RL以上	平均	合計
デカセギ有	4(36.4)	5(45.5)	2(18.2)	0(0.0)	0(0.0)	3729.4	11(100.0)
デカセギ無	1(2.3)	10(23.3)	14(32.6)	11(25.6)	7(16.3)	10725.3	43(100.0)

デカセギの経験は父母の日本語能力にも影響を与えていることが予想される。しかし、父母の日本語能力を会話、リーディング、リスニング、ライティングのそれぞれについて聞いてみても、統計的に有意な差は見いだされなかった（表2-8～11）。しかし、「ほとんど話せない」「ほとんど読めない」「ほとんどわからない」「何も書けない」という、それぞれの項目でもっとも能力の低いカテゴリーに注目すると、「聞く」以外は明確な差が表われているようである。デカセギは日本語能力の底上げには一役買っているといえそうである。

現在住んでいる地域については、今後も「住み続けたい」という者がデカセギ経験者の69.2%、未経験者の73.1%に達しており、デカセギ経験の有無にかかわらず高い満足感が伺える（表2-12）。しかし、その理由をみると、「別の場所に移りたい」と答えた者の場合、「生活環境が悪いから」や「人間環境が悪いから」といった、ネガティブな選択肢を選ぶ者が多くなっている。

表2-8 日本語能力：会話

	流暢に話せる	かなり話せる	簡単な内容なら	ほとんど話せない	合計
デカセギ有	2(16.7)	6(50.0)	4(33.3)	0(0.0)	12(100.0)
デカセギ無	12(22.2)	14(25.9)	13(24.1)	15(27.8)	54(100.0)

表2-9 日本語能力：読む

	日本語新聞が読める	簡単な雑誌が読める	簡単な内容なら読める	ほとんど読めない	合計
デカセギ有	1(8.3)	2(16.7)	7(58.3)	2(16.7)	12(100.0)
デカセギ無	7(13.0)	8(14.8)	14(25.9)	25(46.3)	54(100.0)

表2-10 日本語能力：聞く

	ニュースがわかる	日常生活の話題がわかる	基本的な内容ならわかる	ほとんどわからない	合計
デカセギ有	3(23.1)	2(15.4)	5(38.5)	3(23.1)	13(100.0)
デカセギ無	11(20.4)	15(27.8)	12(22.2)	16(29.6)	54(100.0)

表2-11 日本語能力：書く

	どんな文章でも書ける	簡単なメモが書ける	文字がいくつか書ける	何も書けない	合計
デカセギ有	2(16.7)	6(50.0)	3(25.0)	1(8.3)	12(100.0)
デカセギ無	6(11.1)	20(37.0)	16(29.6)	12(22.2)	54(100.0)

表2-12 現在住んでいるところに今後も住みたいですか

	住み続けたい	別の場所に移りたい	必ず移らなければならない	わからない	合計
デカセギ有	9(69.2)	3(23.1)	0(0.0)	1(7.7)	13(100.0)
デカセギ無	38(73.1)	11(21.0)	1(1.9)	2(3.8)	52(100.0)

表2-13 それはなぜですか

	生活環境がよいから	人間環境がよいから	親の面倒をみるため	土地や家屋があるから	移るためのよい土地がないから	生活環境が悪いから
デカセギ有	0(0.0)	1(10.0)	0(0.0)	1(10.0)	0(0.0)	4(40.0)
デカセギ無	0(0.0)	0(0.0)	2(4.1)	7(14.3)	0(0.0)	17(34.7)

	人間環境が悪いから	転勤があるから	転職するから	よい職場がないから	その他	特に理由はない	合計
デカセギ有	2(20.0)	1(10.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(30.0)	10(100.0)
デカセギ無	12(24.5)	3(6.1)	0(0.0)	0(0.0)	17(34.7)	9(18.4)	49(100.0)

続いて父母たちのデカセギ観をみてみよう。デカセギに「どんどん行くべき」という者は、デカセギ未経験者の27.8%に対してデカセギ経験者では61.5%と圧倒的に多くなっている（表2-14）。かといって未経験者もデカセギを頭ごなしに否定しているわけではなく、63.0%が「仕方がない」と答えている。「あまり好ましくない」「好ましくない」と答えた者はデカセギ経験者で15.4%、未経験者で9.3%にとどまり、デカセギがブラジルの日系人たちに広く受け入れられていることを示している。

理由をみると、未経験者では「生活のためには仕方がないから」という者が55.6%と半数を超えている（表2-15）。経験者では「日本の文化を知ることができるから」が53.8%でもっとも多くなっており、より積極的な動機付けを日本へのデカセギに与えていることがわかる。ブラジル経済への影響やブラジル社会への影響を挙げる者は経験者、未経験者ともほとんどいないが、しかし日本へのデカセギがブラジルにいい影響を与えているかどうかを聞くと、デカセギ経験者では92.3%が、未経験者でも75.5%が「よい影響を与えている」「多少よい影響を与えている」と答えている（表2-16）。

ではデカセギは子どもたちにどのような影響を与えていると考えているのだろうか。日本での生活が子どもに与える影響では、経験者、未経験者を問わず言葉の問題が大きな問題として認識されている（表2-17）。また、「礼儀がしつけられない」という者が経験者では0人であるのに対し、未経験者では14.8%と懸念材料となっていることがわかる。一方で「国際的な視野が広がる」ことを期待する者も経験者の61.5%、未経験者の53.7%と多くいる。

デカセギで子どもを日本に連れていくことへの意見をより詳細に見てみよう。表2-18は、それぞれの意見に対して「そう思う」を5点、「まったく思わない」を1点として5段階で評価してもらったものの平均点を求めたものである。全員が「そう思う」と回答した場合は5.00、全員が「まったく思わない」と回答した場合は1.00となり、中間値は3.00となっている。これをみると「子どもの年齢が低ければ影響は少ない」と楽観的に考えている者は少ないことがわかる。多くが賛同しているのは「日本語を身につけられてよい」と「日本は治安がよいので子連れでも安心」、そして「家族が離れて生活するよりはよい」という意見である。このような、家族が離れることへの抵抗感は強く、家族でデカセギに行くことへの意見を聞いても、「家族一緒ならばよい」という者が経

表2-14 日系人が日本へデカセギに行くことについて

	どんどん行くべき	仕方がない	あまり好ましくない	行くべきでない	合計
デカセギ有	8(61.5)	3(23.1)	1(7.7)	1(7.7)	13(100.0)
デカセギ無	15(27.8)	34(63.0)	3(5.6)	2(3.7)	54(100.0)

表2-15 それはなぜですか（複数選択）

	ブラジルの経済が活性化するから	ブラジルの社会が活性化するから	生活のためには仕方がないから	日系人が祖国に行くのは当然だから	日本の文化を知ることができるから	ブラジル人はブラジルで働くべきだから
デカセギ有	1(7.7)	1(7.7)	4(30.8)	4(30.8)	7(53.8)	0(0.0)
デカセギ無	3(5.6)	2(3.7)	30(55.6)	14(25.9)	26(48.1)	3(5.9)

	ブラジルの経済が停滞するから	ブラジルの社会から活気がなくなるから	子どもの教育に影響があるから	その他	特に理由はない	合計
デカセギ有	2(15.4)	1(7.7)	5(38.5)	4(30.8)	0(0.0)	13(100.0)
デカセギ無	0(0.0)	1(1.9)	13(24.1)	11(20.4)	0(0.0)	54(100.0)

表2-16 日本へのデカセギはブラジルにより影響を与えていると思いますか

	よい影響を与えている	多少よい影響を与えている	どちらかといえば悪い影響を与えている	悪い影響を与えている	合計
デカセギ有	8(61.5)	4(30.8)	1(7.7)	0(0.0)	13(100.0)
デカセギ無	9(17.0)	31(58.5)	12(22.6)	1(1.9)	53(100.0)

表2-17 日本での生活は子どもにどのような影響を与えていると思いますか（複数回答）

	ポルトガル語を覚えられない	ブラジルの歴史を覚えられない	食生活の好みが日本的になる	遊びが日本的になる	礼儀がしつけられない	国際的な視野が広がる	その他	合計
デカセギ有	8(61.5)	5(38.5)	2(15.4)	4(30.8)	0(0.0)	8(61.5)	5(38.5)	13(100.0)
デカセギ無	26(48.1)	19(35.2)	6(11.1)	10(18.5)	8(14.8)	29(53.7)	11(20.4)	54(100.0)

表2-18 デカセギで子どもを日本に連れていくことについて

	デカセギ有り	デカセギ無し	t検定
子どもの年齢が低ければ影響は少ない	2.27	2.66	p=.465
日系人にとって日本をやるよい機会だ	3.75	3.82	p=.866
日本語を身につけられてよい	4.67	4.48	p=.496
日本は治安がよいので子連れでも安心だ	4.92	4.20	p=.000
家族が離れて生活するよりはよい	4.58	4.56	p=.947
将来ブラジルでの進学が不利になる	3.58	2.56	p=.014
将来ブラジルでの就職が不利になる	3.36	2.66	p=.150
ブラジルに帰国した後が難しいと思う	3.31	3.78	p=.234
子どものアイデンティティが確立しないと思う	2.67	3.12	p=.317
日本にいても母国の教育を心がければ問題ない	3.67	2.98	p=.092

※「そう思う」=5点、「まったく思わない」=1点として5段階で評価した平均値

表2-19 家族でデカセギに行くことについてどう思いますか

	家族一緒ならばよい	親だけが単身で行く方がよい	デカセギはいくべきでない	合計
デカセギ有	9(75.0)	0(0.0)	3(25.0)	12(100.0)
デカセギ無	39(73.6)	1(1.9)	13(24.5)	53(100.0)

験者の75.0%、未経験者の73.6%に達している（表2-19）。「親だけが単身で行く方がよい」という者は未経験者に1人いるだけである。

親たちの背景の最後に、教育観を見ておこう。子どもへの学歴期待をみると、経験者の53.8%、未経験者の58.5%が大学院まで行かせたいと答えており、日本を遙かに上回る高学歴志向が伺える（表2-20）。大学までという者も合わせると、経験者の84.6%、未経験者の92.5%が四年制大学以上の学歴を望んでいることがわかる。なお、進学先ではブラジルを選ぶ者が最も多く、経験者の53.8%、未経験者の42.3%を占めている（表2-21）。日本を希望する者も経験者、未経験者ともに15.4%ずついるものの、これはアメリカへの進学を希望する者よりも少ない数字となっている。

私学であるO校に子どもを通わせている理由としては、学習レベルを挙げる者が経験者では76.9%ともっとも多くなっており、未経験者でも65.5%が選択している（表2-22）。かといってこれは直接進学を見据えている意見ではないようであり、「進学するのに有利だから」を挙げた者は経験者、未経験者とも15%前後と少ない。また、「日本のことを教えてくれるから」が経験者で61.5%、未経験者で70.9%と多くなっているほか、「しつけをしてくれるから」も経験者の61.5%、未経験者の69.1%に選ばれていた。日系人学校の特徴を聞いてみても「日本語を身につけられる」「日本の

文化を身につけられる」「基本的な礼儀が身につく」の3項目で得点が4点台後半となっており、学力だけでなく、日本の文化を尊重する校風、あるいは日本的なしつけのあり方が高く評価されているようである（表2-23）。

表2-20 お子さんにどの程度の教育を受けさせたいですか

	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	その他	合計
デカセギ有	0(0.0)	0(0.0)	1(7.7)	1(7.7)	4(30.8)	7(53.8)	0(0.0)	13(100.0)
デカセギ無	1(1.9)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	18(34.0)	31(58.5)	3(5.7)	53(100.0)

表2-21 どの国で進学させたいですか

	ブラジル	日本	アメリカ	その他	合計
デカセギ有	7(53.8)	2(15.4)	3(23.1)	1(7.7)	13(100.0)
デカセギ無	22(42.3)	8(15.4)	14(26.9)	8(15.4)	52(100.0)

表2-22 なぜお子さんをこの学校に通わせているのですか（複数回答）

	学習レベルがあっているから	進学するのに有利だから	就職するのに有利だから	日系人が多く通っているから	子どもの友達に通っているから	子どもが行きたがったから	しつけをしてくれるから
デカセギ有	10(76.9)	2(15.4)	1(7.7)	3(23.1)	0(0.0)	0(0.0)	8(61.5)
デカセギ無	36(65.5)	8(14.5)	8(14.5)	13(23.6)	5(9.1)	4(7.3)	38(69.1)

	日本のことを教えてくれるから	近いから	他にいい学校がないから	その他	特に理由は無い	合計
デカセギ有	8(61.5)	2(15.4)	1(7.7)	3(23.1)	0(0.0)	13(100.0)
デカセギ無	39(70.9)	16(29.1)	2(3.6)	10(18.2)	1(1.8)	55(100.0)

表2-23 日系人学校の特徴をどのように思いますか

	デカセギ有り	デカセギ無し	t検定
日本語を身につけられる	4.69	4.53	p=.491
日本語で学ぶので日系人には理解しやすい	3.45	2.86	p=.220
日本の文化を身につけられる	4.83	4.70	p=.477
学力レベルの高いところが多い	3.64	3.30	p=.490
将来の就職に有利	3.60	3.34	p=.539
基本的な礼儀が身につく	4.50	4.28	p=.433

※「そう思う」=5点、「まったく思わない」=1点として5段階で評価した平均値

第2節 デカセギ経験者の意識

では、実際にデカセギへ行ったことのある者の、デカセギの実態を見てくことにしよう。まず、デカセギに行った理由を聞くと、「ブラジルの経済が不安定だったから」が66.7%と圧倒的に多くなっている（表2-24）。政情の不安定さを挙げる者も4分の1いる一方で、起業するための資金確保などの積極的な理由を挙げる者は余りいなかった。「外国へ行ってみたかったから」という理由も33.3%の人が挙げており、決してやむにやまれぬ事情でというばかりではないようである。

日本へは、家族全員で行った者と家族の一部がブラジルに残った者とがちょうど半々になっている（表2-25）。しかし、子どもをブラジルに残していったという者は1人もいない（表2-26）。親子が別れ別れになることに対する抵抗感がここにも反映されている。なお、日本に子どもを連れて行った、あるいは日本で子どもが生まれたという8人のうち、6人は日本の幼稚園、日本の公立学校へ子どもを通わせている（表2-27）。一方でブラジル人託児所やブラジル人学校の利用者は、今

回の調査対象者の中には一人もいなかった。子どもを日本の幼稚園、学校に通わせた理由は、設備と距離が2大要素となっているほか、日本語が習えること（57.1%）、費用（42.9%）、教育内容（42.9%）などが挙げられていた（表2-28）。ポルトガル語が通じることや、ブラジル流の教育内容を重視する者は1人もおらず、父母たちの「日本的」であることへの拘りが見られる。

表2-24 デカセギに行ったのはなぜですか（複数回答）

	度数	パーセント
ブラジルの経済が不安定だったから	8	66.7
ブラジルの政情が不安定だったから	3	25.0
ブラジルで起業する資金がほしかったから	1	8.3
日本の企業に関心があったから	3	25.0
家族・親戚が行っていたから	4	33.3
デカセギに行って成功した人の話を聞いたから	1	8.3
外国へ行ってみたかったから	4	33.3
その他	0	0.0
合計	12	100.0

表2-25 日本へは家族全員で行きましたか

	度数	パーセント
家族全員で行った	5	50.0
家族の一部がブラジルに残った	5	50.0
合計	10	100.0

表2-26 デカセギの際、お子さんはどうされましたか

	度数	パーセント
一緒に連れて行った	4	36.4
ブラジルに残した	0	0.0
日本で生まれた	4	36.4
まだ生まれていなかった	3	27.3
合計	11	100.0

表2-27 日本でお子さんは幼稚園や学校などに通いましたか（複数回答）

	度数	パーセント
ブラジル人託児所	0	0.0
日本の幼稚園	6	75.0
日本の保育所	0	0.0
日本の公立学校	6	75.0
日本のブラジル人学校	0	0.0
その他	0	0.0
特に利用していない	1	12.5
合計	8	100.0

表2-28 そこに入れたのはなぜですか

	度数	パーセント
ポルトガル語が通じるから	0	0.0
教育内容がブラジルのだから	0	0.0
設備がよいから	5	71.4
費用が安いから	3	42.9
教育内容がよいから	3	42.9
長時間預かってくれるから	2	28.6
日本語が習えるから	4	57.1
教育内容が日本的だから	2	28.6
近かったから	5	71.4
周りの人が通わせていたから	0	0.0
その他	0	0.0
特に理由はない	0	0.0
合計	7	100.0

日本へ行った経緯は、デカセギの仲介会社を通してのことが多い（表2-29）。その他、先に行っていた家族を頼っての渡日と、日本企業を通じての渡日が挙げられている。

日本では様々な職業を経験することになったようであるが、多くは工員のような単純労働者であり、専門職や技術職についた者は誰もいなかった（表2-30）。そのような環境の中で、父母たちには多くの困難があったと予想される。しかし、日本で困ったことを聞くと半数が「特に困ったことはない」と答えている（表2-31）。実際に困ったことがある者でも、「日本語がわからなかった」という者が41.7%と目立つくらいである。また、実際に何か困ったことに遭遇した場合でも、父母たちは周囲のサポートによってその困難を克服してきたようである。困った場合の解決法を聞くと、「日本人の知り合いに相談した」「日系ブラジル人の知り合いに相談した」（共に66.7%）をはじめとして、様々な人たちに相談することで困難を乗り越えていたことがわかる（表2-32）。また、多くの父母が渡日に際して利用したデカセギ仲介業者も、22.2%の父母にとって困難に際しての相談相手となっていた。

このように様々なネットワークを通じて日本での生活を乗り切っていた父母たちは、多くの在日ブラジル人労働者の滞在時期が長期化し、実質定住化していくなかで、若くしてブラジルに帰国を果たしている。では、彼らはなぜブラジルに帰国できたのであろうか。その理由を聞くと、「その他」を除けば「家族と一緒に暮らしたかったから」が33.3%でもっとも多くなっている（表2-33）。続いて「予定していた帰国時期になったから」とともに「お金が貯まったから」が25.0%となっている。

ブラジル帰国後は、子どももスムーズにブラジルでの生活に慣れていっている（表2-34）。その理由では「日本での生活が長かったから」と「日本式の教育を受けたから」が50.0%と多くなっているが、「長かったから（日本式の教育を受けたから）慣れなかった」というよりは、そのような状況にもかかわらずじきに慣れたという文脈で説明されているようである。

表2-29 日本へはどのような経緯で行きましたか（複数回答）

	度数	パーセント
仲介会社を通じて	7	58.3
先に日本へ行っていた家族を通じて	4	33.3
先に日本へ行っていた友人を通じて	0	0.0
日本企業を通じて	3	25.0
その他	0	0.0
合計	12	100.0

表2-30 日本ではどのような仕事をしましたか（複数回答）

	度数	パーセント
工員（精密機器）	6	50.0
工員（食品）	1	8.3
料理人	1	8.3
ウェイター、皿洗い	1	8.3
事務職員	1	8.3
その他	6	50.0
合計	12	100.0

表2-31 日本で困ったことはありましたか（複数回答）

	度数	パーセント
日本語がわからなかった	5	41.7
知り合いができなかった	0	0.0
仕事が見つからなかった	0	0.0
外国人であることを理由に差別を受けた	2	16.7
お金がなかった	0	0.0
子どもが学校の勉強についていけなかった	0	0.0
子どもがいじめられた	1	8.3
子どもに友達ができなかった	0	0.0
日本の食事が口に合わなかった	2	16.7
自分が何人であるのかわからなくなった	2	16.7
家族との連絡がつかなかった	0	0.0
帰国の目処がなかなかなかたなかった	2	16.7
その他	0	0.0
特に困ったことはない	6	50.0
合計	12	100.0

表2-32 日本で困ったときどのように解決しましたか（複数回答）

	度数	パーセント
家族に相談した	3	33.3
ブラジルに残っている家族、親戚に相談した	2	22.2
日本人の知り合いに相談した	6	66.7
日系ブラジル人の知り合いに相談した	6	66.7
ブラジル人以外の外国人の知り合いに相談した	1	11.1
雇用主に相談した	2	22.2
学校の先生に相談した	2	22.2
デカセギの仲介業者に相談した	2	22.2
自分で解決した	1	11.1
その他	0	0.0
特に何もしなかった	0	0.0
合計	9	100.0

表2-33 日本から帰ってきたのはなぜですか

	度数	パーセント
ブラジルの経済が安定したから	1	8.3
ブラジルの治安が安定したから	0	0.0
お金が貯まったから	3	25.0
高齢になったから	0	0.0
仕事がなくなったから	0	0.0
日本の経済が不安定になったから	1	8.3
日本に住みにくくなったから	0	0.0
お金がなくなったから	0	0.0
家族と一緒に暮らしたかったから	4	33.3
予定していた帰国時期になったから	3	25.0
その他	6	50.0
特に理由はない	0	0.0
合計	12	100.0

表2-34 ブラジルに帰国してからお子さんはブラジルでの生活にすぐ慣れましたか

	度数	パーセント
すぐ慣れた	3	42.9
しばらくしたら慣れた	2	28.6
なかなか慣れない	2	28.6
まったく慣れていない	0	0.0
合計	7	100.0

表2-35 それはなぜだと思いますか（複数回答）

	度数	パーセント
日本での生活が短かったから	2	33.3
元々ブラジル人だから	1	16.7
ブラジル式の教育をしていたから	0	0.0
ポルトガル語を教えていたから	0	0.0
日本での生活が長かったから	3	50.0
日本式の教育を受けたから	3	50.0
ポルトガル語が上手くないから	1	16.7
友だちがいないから	0	0.0
学習の進度が違うから	2	33.3
その他	0	0.0
わからない	0	0.0
合計	6	100.0

最後に、日本にまた行きたいかどうかを聞いた（表2-36）。その結果、3分の2にあたる8人が「できれば行きたくない」「絶対に行きたくない」と答えている。理由としてはブラジルで成功したことを挙げるものが40.0%となっている（表2-37）。

表2-36 また日本に行きたいと思いますか

	度数	パーセント
行く予定が立っている	1	8.3
予定はないが行きたい	3	25.0
できれば行きたくない	4	33.3
絶対に行きたくない	4	33.3
合計	12	100.0

表2-37 それはなぜですか（複数回答）

	度数	パーセント
デカセギで稼いだお金がなくなったから	1	10.0
ブラジルの経済が不安定だから	2	20.0
ブラジルの政情が不安定だから	1	10.0
日本が生活しやすかったから	5	50.0
もともと一時的な帰国だから	1	10.0
家族が日本にいるから	1	10.0
ブラジルで成功したから	4	40.0
日本で嫌な思いをしたから	0	0.0
日本に行っても豊かになれないから	1	10.0
ブラジルに家族がいるから	2	20.0
その他	2	20.0
特に理由はない	0	0.0
合計	10	10.0

第3節 デカセギ未経験者の意識

続いてデカセギ未経験者の意識を、家族にデカセギ経験者がいる者といない者とにわけて見ていこう。なお、家族にデカセギ経験者がいる者は、54人中74.1%にあたる40人となっており（表2-38）、このことからブラジルの日系人の間で、日本へのデカセギが一般的なものになっていることが伺える。

表2-38 あなたの家族にデカセギに行ったことのある人はいますか

	度数	パーセント
いる	40	74.1
いない	14	25.9
合計	54	100.0

第1項 家族にデカセギ経験者がいる未経験者のデカセギ観

デカセギへ行ったのが誰かをきくと、兄弟姉妹がデカセギを経験しているという者が42.1%と多くなっている（表2-39）。また、「その他」では従兄弟が多く挙げられており、父母たちと近い年齢層の者が選ばれて日本へデカセギに行っている様子をうかがわせている。日本へ行った家族に、親や子どもなどの一親等親族が少ないためか、日本へ行っている家族との連絡は余り取られておらず、「ほとんど連絡を取っていなかった」者が61.7%を占めるほか（表2-40）、仕送りを受け取っている者も、7.2%（2人）しかいなかった。

家族の一部が日本へ行くことによってどのような問題が生じるのだろうか。家族にデカセギ経験者がいるデカセギ未経験者の意識では、「特に問題はない」がもっとも多く、48.5%と半数近い（表2-41）。それ以外では「子どもが寂しがる」（33.3%）と「家族と連絡が取れず不安になる」（24.2%）がやや多くなっている。これらの問題に対しては電話やメールといった手段で連絡を取るという対処法が取られている（表2-42）。また、「特に何もしない」という者も30.0%いた。

表2-39 デカセギへ行ったのは誰ですか（複数回答）

	度数	パーセント
あなたの配偶者	1	2.6
あなたのお父さん	3	7.9
あなたのお母さん	7	18.4
あなたの兄弟姉妹	16	42.1
あなたの子どもさん	1	2.6
その他	23	60.5
合計	38	100.0

表2-40 デカセギに行っていた家族とどのくらい連絡を取っていましたか

	度数	パーセント
毎日	1	2.9
週に1度以上は	4	11.8
月に1度以上は	8	23.5
ほとんど連絡をとっていなかった	21	61.7
合計	34	100.0

表2-41 家族が日本とブラジルで分かれていることについて問題がありましたか

	度数	パーセント
子どもが寂しがる	11	33.3
子どもがいじめられる	0	0.0
子どもが親の顔を忘れる	3	9.1
子どもが日本に行きたがる	2	6.1
お金が余計にかかる	3	9.1
家族と連絡が取れず不安になる	8	24.2
その他	3	9.1
特に問題はない	16	48.5
合計	33	100.0

表2-42 問題を解決するためにどのようなことをしていましたか

	度数	パーセント
手紙を出す	2	6.7
電話をする	9	30.0
日本へ行く	1	3.3
メールをする	12	40.0
その他	4	13.3
特に何もしていない	9	30.0
合計	30	100.0

第2項 周囲にデカセギ経験者がいない未経験者のデカセギ観

では家族にデカセギ経験者が一人もいない者のデカセギ観はどうであろうか。日本へデカセギに行ってみたくどうかを聞くと、86.7%にあたる13人は「できれば行きたくない」「絶対に行きたくない」と答えていた(表2-43)。日本に行く必要がないからという者が85.7%を占めている(表2-44)ことからわかるように、そもそもデカセギを経験していない人々は社会階層も高いことが、デカセギへの興味を喚起させない理由になっていると考えられる。

表2-43 日本へデカセギへ行ってみたくと思いますか

	度数	パーセント
行く予定がある	0	0.0
予定はないが行きたい	2	13.8
できれば行きたくない	6	40.0
絶対に行きたくない	7	46.7
合計	15	100.0

表2-44 それはなぜですか(複数回答)

	度数	パーセント
ブラジルの経済が不安定だから	1	7.1
ブラジルの政情が不安定だから	0	0.0
家族が日本にいるから	0	0.0
ブラジルで成功したから	4	28.6
日本で嫌な思いをしたから	0	0.0
日本に行っても豊かになれないから	0	0.0
ブラジルに家族がいるから	6	42.9
日本に行く必要がないから	12	85.7
その他	2	14.3
特に理由はない	0	0.0
合計	14	100.0

第4節 まとめ

父母たちの意識をここでいったんまとめておくならば、まず第1点目にデカセギ経験者と未経験者の社会階層に大きな差があることが確認された。学歴や職業のような社会階層は経験者と未経験者で大きく異なり、特に世帯収入にいたってはデカセギ未経験者の方が、デカセギ経験者よりも3倍近く多かった。このような社会背景の違いがデカセギに行くか行かないかの大きな分岐点となっているようである。

2点目にデカセギ経験者とデカセギ未経験者との、デカセギに対する意識が大きく異なることがわかった。デカセギ未経験者にとってデカセギは、生活のために仕方なく行くものであり、各家庭の実情を考慮すると致し方ないものとして捉えている。それに対し、デカセギ経験者は、デカセギに対して彼らなりの積極的な動機付けをしている。

3点目に、デカセギ経験者の意識とデカセギ実態に注目すると、日本において厳しい職業環境にさらされていながらも、それらを特に困難とは思わず、また、何か問題に当たっても、周囲との連携によってその困難を乗り越えているというたくましいデカセギ労働者像が明らかになった。また、子どもの教育に関しては、多くが設備面などから日本の幼稚園や公立学校を利用している実態が明らかになった。彼らにとってブラジルの教育はさして大きな問題ではなく、むしろ日本語を学べる契機として日本の学校を積極的に活用していた。ただし、日本へもう一度行きたいかという質問に対しては、行きたくないという者が多かった。

第3章 デカセギに関する児童の意識

第1節 児童たちの背景

日系人学校に通う子どもたちの教育やデカセギに対する意識を見ていこう。なお、32人の回答者のうち、日本で生まれた3人を含む14人が日本へ行った経験を持っている（表3-1）。学年をみると第7学年（11人）や第8学年（8人）が多くなっている（表3-2）。また、性別をみると回答があった者のなかでは男児が16人、女児が13人となっている（表3-3）。

日本へ行った経験は、彼らの日本語能力に大きな影響を与えている。日本で生まれた3人は、会話、リーディング、ヒアリング、ライティングのいずれにおいても高い日本語能力を自覚している（表3-4～7）。また、日本経験がある児童も、全くない児童よりは高い日本語能力を示しているといえる。

日本に対する児童たちの意識は概して好意的である（表3-8）。半数が国際的な影響力の強い国と認識しているほか、31人中13人が、ブラジルにとって日本は必要な国であると答えている。また、日本への好意的な印象は日本を経験していない児童や日本で生まれた児童よりも、ブラジルで生ま

表3-1 日本へ行ったことがありますか

	度数	パーセント
ある	11	34.4
日本で生まれた	3	9.4
ない	17	53.1
不明（無回答）	1	3.1
合計	32	100.0

表3-2 学年

	2年	4年	5年	6年	7年	8年	合計
有り	1(9.1)	1(9.1)	0(0.0)	1(9.1)	4(36.4)	4(36.4)	11(100.0)
日本生	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	0(0.0)	1(33.3)	3(100.0)
無し	0(0.0)	3(17.6)	2(11.8)	2(11.8)	7(41.2)	3(17.6)	17(100.0)

表3-3 性別

	男児	女児	合計
有り	7(63.6)	4(36.4)	11(100.0)
日本生	2(66.7)	1(33.3)	3(100.0)
無し	7(46.7)	8(53.3)	15(100.0)

表3-4 日本語能力：会話

	滑らかに話せる	ゆっくりなら話せる	簡単な内容なら話せる	話せない	合計
有り	3(27.3)	2(18.2)	6(54.5)	0(0.0)	11(100.0)
日本生	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	1(5.9)	0(0.0)	10(58.8)	6(35.3)	17(100.0)

表3-5 日本語能力：読む

	日本語の本が読める	日本語の絵本が読める	簡単なメモが読める	読めない	合計
有り	4(36.4)	6(54.5)	1(9.1)	0(0.0)	11(100.0)
日本生	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	4(26.7)	5(33.3)	5(33.3)	1(6.7)	15(100.0)

表3-6 日本語能力：聞く

	テレビ・ラジオが聞ける	日常会話が聞ける	簡単な内容なら聞ける	わからない	合計
有り	3(27.3)	6(54.5)	2(18.2)	0(0.0)	11(100.0)
日本生	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	1(6.7)	3(20.0)	9(60.0)	2(13.3)	15(100.0)

表3-7 日本語能力：書く

	どんな文章でも書ける	簡単なメモが書ける	文字がいくつか書ける	書けない	合計
有り	4(40.0)	6(60.0)	0(0.0)	0(0.0)	10(100.0)
日本生	2(66.7)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	2(13.3)	10(66.7)	2(13.3)	1(6.7)	15(100.0)

表3-8 日本という国についてどのようなイメージを持っていますか（複数回答）

	ブラジルと仲のよい国	豊かな国	歴史の古い国	国際的な影響力の強い国	ブラジルにとって必要な国	ブラジルと仲の悪い国
有り	8(72.7)	10(90.9)	10(90.9)	6(54.5)	7(63.6)	1(9.1)
日本生	1(33.3)	2(66.7)	2(66.7)	2(66.7)	1(33.3)	0(0.0)
無し	8(47.1)	15(88.2)	10(58.8)	8(47.1)	5(29.4)	0(0.0)

	貧しい国	新しい国	国際的に見て目立たない国	ブラジルにとって有害な国	その他	合計
有り	0(0.0)	7(63.6)	0(0.0)	0(0.0)	1(9.1)	11(100.0)
日本生	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	1(5.9)	13(76.5)	1(5.9)	0(0.0)	0(0.0)	17(100.0)

れて日本へ行ったことのある児童において高くなっているようである。

さて、ここで児童たちの教育に対する意識や生活像を少し見ておこう。児童たちの勉強やスポーツに関する自己評価は低くない（表3-9, 10）。勉強への評価は日本経験者が最も高く、7割以上が肯定的な評価をしている。それに対して日本へ行ったことのない児童は評価が半々に割れている。スポーツに関しては、日本経験の有無を問わず、ほぼ同様の自己評価をしている。

近年、日本で問題となっている家庭での学習時間をみると、ほとんどの児童が毎日少しは家庭でも勉強をしており、「まったくやらない」という児童は3人だけであった（表3-11）。このような勤勉さは、家族を挙げての高学歴志向に支えられているようである。第2章でみたように、父母たちの子どもたちに対する学歴期待は非常に高く、ほとんどすべてと行ってよい父母が四年制大学か大学院への進学を希望していた。このような父母たちの意識を児童も敏感に察しており、約9割の児童が、父親、母親とも自分を大学まで上げたがっていると感じている（表3-12, 13）。また、この期待に応える形で、多くの児童が、自らも大学、大学院への進学を希望している。

では、進学先はどこを希望しているのだろうか。まず、親の期待をどのように感じているかを確認すると、多くはブラジルでの進学を期待されていると感じているようである。しかし、そのような中で、日本経験がある児童とない児童との間で、意識の違いがみられる。まず、日本経験がある児童は、父親についてはブラジルでの進学を期待されていると感じている者が71.4%を占めている一方で日本での進学を期待されていると感じている者はおらず、また、母親については日本への進学期待を感じている者が28.6%まで増えている。それが、日本経験のない児童では父親からブラジルでの進学を期待されていると感じている者が57.1%と相対的に少なくなっている。母親につ

いては、余り両者に受け取り方の違いはみられないようである。

では、本人はどこでの進学を希望しているのか。ブラジルで生まれた者では、ブラジルでの進学を希望する者が日本経験の有無に限らず多くなっているが、日本経験のない児童では全員がブラジルでの進学を希望している（表3-17）。それに対し、日本で生まれた3人に関しては、全員が日本での進学を希望している。なお、父母の期待とは異なり、アメリカへの進学を希望する者が一人もない点も特徴として挙げられよう。

進学に関してはブラジルでの進学を希望する児童が多いものの、就職に関しては日本での就職を希望する児童が増えている。日本経験児童では62.5%が、日本生まれの児童でも3人中2人が日本での就職を希望している（表3-19）。ただし、日本に行ったことのない児童では、日本での就職を希望する者も26.7%いるものの、やはりブラジルでの就職を希望する者が40.0%でもっとも多くなっている。

表3-9 勉強はよくできますか

	よくできる	まあまあできる	あまりできない	まったくできない	合計
有り	3(27.3)	5(45.5)	3(27.3)	0(0.0)	11(100.0)
日本生	0(0.0)	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)	3(100.0)
無し	0(0.0)	9(52.9)	8(47.1)	0(0.0)	17(100.0)

表3-10 スポーツは得意ですか

	得意	まあまあ得意	あまりできない	まったくできない	合計
有り	3(33.3)	4(44.4)	2(22.2)	0(0.0)	9(100.0)
日本生	0(0.0)	2(66.7)	1(33.3)	0(0.0)	3(100.0)
無し	4(23.5)	8(47.1)	5(29.4)	0(0.0)	17(100.0)

表3-11 学校から帰ってからどのくらい勉強しますか

	まったくやらない	30分未満	1時間未満	2時間未満	3時間未満	4時間未満	合計
有り	1(9.1)	3(27.3)	1(9.1)	6(54.5)	0(0.0)	0(0.0)	11(100.0)
日本生	0(0.0)	1(33.3)	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	2(11.8)	6(35.3)	3(17.6)	5(29.4)	0(0.0)	1(5.9)	17(100.0)

表3-12 あなたの親はあなたをどの学校まであげたいと考えていると思いますか：父親

	小学校	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	その他	合計
有り	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(12.5)	0(0.0)	7(87.5)	0(0.0)	0(0.0)	8(100.0)
日本生	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(11.8)	15(88.2)	0(0.0)	0(0.0)	17(100.0)

表3-13 あなたの親はあなたをどの学校まであげたいと考えていると思いますか：母親

	小学校	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	その他	合計
有り	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(10.0)	9(90.0)	0(0.0)	0(0.0)	10(100.0)
日本生	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(11.8)	15(88.2)	0(0.0)	0(0.0)	17(100.0)

表3-14 あなたは将来どこまで学校に進みたいと思いますか

	中学校	高校	専門学校	短大	大学	大学院	その他	合計
有り	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(18.2)	1(9.1)	6(54.5)	2(18.2)	11(100.0)
日本生	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	0(0.0)	0(0.0)	1(5.9)	1(5.9)	8(47.1)	6(35.3)	1(5.9)	17(100.0)

表3-15 あなたの親はどここの国であなたを進学させたいと考えていると思いますか：父親

	ブラジル	日本	アメリカ	その他	合計
有り	5(71.4)	0(0.0)	2(28.6)	0(0.0)	7(100.0)
日本生	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	4(26.7)	5(33.3)	2(13.3)	4(26.7)	15(100.0)

表3-16 あなたの親はどここの国であなたを進学させたいと考えていると思いますか：母親

	ブラジル	日本	アメリカ	その他	合計
有り	4(57.1)	2(28.6)	1(14.3)	0(0.0)	7(100.0)
日本生	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	8(53.3)	2(13.3)	2(13.3)	3(20.0)	15(100.0)

表3-17 どの国で進学したいですか

	ブラジル	日本	アメリカ	その他	合計
有り	8(72.7)	3(27.3)	0(0.0)	0(0.0)	11(100.0)
日本生	0(0.0)	3(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	17(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	17(100.0)

表3-18 将来どんな仕事に就きたいと思いますか

	就きたい仕事がある	まだはっきりとはわからない	合計
有り	2(18.2)	9(81.8)	11(100.0)
日本生	0(0.0)	3(100.0)	3(100.0)
無し	9(52.9)	8(47.1)	17(100.0)

表3-19 どここの国で就職したいですか

	ブラジル	日本	アメリカ	その他	合計
有り	1(12.5)	5(62.5)	0(0.0)	2(25.0)	8(100.0)
日本生	1(33.3)	2(66.7)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)
無し	6(40.0)	4(26.7)	2(13.3)	3(20.0)	15(100.0)

表3-20 将来どこに住みたいと考えていますか

	今の住所	サンパウロ市内	サンパウロ市外のサンパウロ州	サンパウロ州外のブラジル
有り	1(10.0)	4(40.0)	0(0.0)	0(0.0)
日本生	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(33.3)
無し	0(0.0)	3(18.8)	2(12.5)	2(12.5)

	日本	日本以外の外国	その他	合計
有り	2(20.0)	2(20.0)	1(10.0)	10(100.0)
日本生	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)	3(100.0)
無し	5(31.3)	1(6.3)	3(18.8)	16(100.0)

将来の居住地については、現在の住所に住み続けたいという児童は1人しかおらず、多くが日本をはじめとする外国へ出て行きたいと考えている（表3-20）。

第2節 日本を経験した児童の意識

では日本を経験したことのある児童（日本へ行ったことがある児童と日本で生まれた児童）の意識をみていこう。なお、日本を経験したことがあるといっても、実際に住んだことがあるのは15人中8人だけである（表3-21、22）。

しかし、そのような状況においても10人は日本で学校に通った経験を持っている²⁾（表3-23）。その影響もあってか、13人中11人が、日本で日本人の友だちができたといっている（表3-24）。日

系ブラジル人の友だちができたという児童は10人中5人、ペルー人やその他の外国人友だちができた児童はそれぞれ1人ずつであるため、日本人との交流が活発に行われていたであろうことがわかる。

日本で困ったことを聞いても、友だちができなかったという児童は1人もいない（表3-25）。日本語がわからなかったことは多くの児童にとって壁となっていたことがうかがえるが、それ以外には、ブラジルの友だちと別れたことを挙げる者が41.7%いるほかは、特に困難はないようである。また、困ったことがあっても、親に相談したり（50.0%）、学校の先生に相談したり（35.7%）、あるいは日本人の友だちに相談したり（28.6%）などしつつ、それらを克服してきたようである（表3-26）。

また、日本滞在中には困難だけでなく、様々な嬉しいこともあったようである。もっとも多かったのは「日本の文化を知ることができた」（66.7%）ことである（表3-27）。また、「日本人の友だちができた」「日本語がわかるようになった」ことも、彼らにとって大きな喜びとなったようである。日本へ行くことで、ブラジル人であることの誇りをもった児童も33.3%いるなど、多くの児童にとって日本へ行った経験は大きな糧となったようだ。帰国後もスムーズにブラジルの生活に慣れていっており（表3-28）、日本へ行ったことが彼らにとってのストレスになった様子はうかがえない。

表3-21 日本に住んだことがありますか

	度数	パーセント
ある	8	53.3
ない	7	46.7
合計	15	100.0

表3-22 日本へはどのような目的で行きましたか（複数回答）

	度数	パーセント
親のデカセギについていった	3	23.1
デカセギに行っている親に会いにいった	0	0.0
デカセギに行っている親戚に会いに行った	0	0.0
観光旅行	5	38.5
その他	10	76.9
合計	15	100.0

表3-23 日本で学校に通いましたか

	度数	パーセント
日本の学校に通った	10	66.7
日本にあるブラジル人学校に通った	0	0.0
学校には通わなかった	4	26.7
その他	1	6.7
合計	15	100.0

表3-24 日本で友だちはできましたか

	たくさんできた	何人かはできた	できなかった	合計
日本人の友だち	6(46.2)	5(38.5)	2(15.4)	13(100.0)
日系ブラジル人の友だち	1(10.0)	4(40.0)	5(50.0)	10(100.0)
日系ペルー人の友だち	0(0.0)	1(14.3)	6(85.7)	7(100.0)
その他の外国人の友だち	0(0.0)	1(14.3)	6(85.7)	7(100.0)

表3-25 日本で困ったことはありましたか（複数回答）

	度数	パーセント
日本語がわからなかった	5	41.7
友だちができなかった	0	0.0
学校へ行けなかった	0	0.0
学校の勉強についていけなかった	1	8.3
外国人だからといじめられた	0	0.0
お金がなかった	1	8.3
日本の食事が口に合わなかった	0	0.0
ブラジルの友だちと離ればなれになった	5	41.7
ポルトガル語を忘れてしまった	0	0.0
ブラジルの食事が口にあわなくなった	0	0.0
自分が何人であるのかよくわからなくなった	0	0.0
帰国の予定が立たなかった	1	8.3
その他	3	25.0
合計	12	100.0

表3-26 困ったことをどのように解決しましたか（複数回答）

	度数	パーセント
親に相談した	7	50.0
日本にきている親戚、家族に相談した	1	7.1
ブラジルに残っている親戚、家族に相談した	0	0.0
日本人の友だちに相談した	4	28.6
日系ブラジル人の友だちに相談した	4	28.6
ブラジル人以外の在日外国人の友だちに相談した	2	14.3
学校の先生に相談した	5	35.7
デカセギを仲介してくれた会社に相談した	0	0.0
自分自身で解決した	3	21.4
その他	2	14.3
合計	14	100.0

表3-27 日本でうれしかったことはありますか（複数回答）

	度数	パーセント
日本人の友だちができた	7	58.3
日本語がわかるようになった	7	58.3
学校で勉強ができた	4	33.3
色々な国の人と知り合いになれた	3	25.0
家が豊かになった	2	16.7
日本の文化を知ることができた	8	66.7
日本の食事が気に入った	5	41.7
ブラジル人であることに誇りをもてるようになった	4	33.3
その他	1	8.3
特に嬉しかったことはない	0	0.0
合計	12	100.0

表3-28 帰国してブラジルの生活にはすぐに慣れましたか

	度数	パーセント
すぐに慣れた	10	71.4
しばらくしたら慣れた	4	28.6
なかなか慣れなかった	0	0.0
まったく慣れていない	0	0.0
合計	14	100.0

それゆえに、15人全員がまた日本に「必ず行きたい」「どちらかといえば行きたい」と回答している（表3-30）。ただし、その理由は日本での進学や、経済効果を期待するものというよりは日本の治安のよさに魅力を感じてのものとなっている（表3-31）。日本へ行く時期が決まっている児童も5人いるほか（表3-32）、53.3%（8人）の児童はそのため日本語の勉強をしているなど、準備を着々と進めているようである（表3-34）。

表3-29 それはなぜですか（複数回答）

	度数	パーセント
日本での生活が短かったから	6	40.0
元々ブラジル人だから	5	33.3
ブラジル式の教育を受けたから	0	0.0
ブラジルの文化を学んでいたから	4	26.7
ポルトガル語を学んでいたから	5	33.3
ブラジルに友だちがいたから	3	20.0
日本での生活が長かったから	2	13.3
日本式の教育を受けていたから	4	26.7
ポルトガル語が上手くないから	4	26.7
友だちがいないから	3	20.0
学習進度が違うから	4	28.6
その他	0	0.0
わからない	1	6.7
合計	15	100.0

表3-30 また日本に行きたいと思いますか

	度数	パーセント
必ず行きたい	11	73.3
どちらかといえば行きたい	4	26.7
余り行きたくない	0	0.0
絶対に行きたくない	0	0.0
合計	15	100.0

表3-31 それはなぜですか（複数回答）

	度数	パーセント
日本で友だちができたから	0	0.0
日本の学校で勉強ができたから	4	28.6
日本に行って豊かになったから	2	14.3
日本の学校へ進学したいから	1	7.1
将来日本で働きたいから	4	28.6
日本は安全だから	10	71.4
日本に家族が残っているから	0	0.0
日本でいじめられたから	0	0.0
日本の学校で勉強についていけなかったから	0	0.0
日本に行っても豊かになれなかったから	0	0.0
ブラジルの学校に進学したいから	0	0.0
ブラジルで就職したいから	0	0.0
ブラジルに友だちがいるから	0	0.0
ブラジルに家族がいるから	1	7.1
その他	5	35.7
合計	14	100.0

表3-32 行く時期は決まっていますか

	度数	パーセント
決まっている	5	33.3
決まっていない	10	66.7
合計	15	100.0

表3-33 どのように行くつもりですか（複数回答）

	度数	パーセント
家族と一緒に	6	40.0
友だちと一緒に	0	0.0
デカセギの会社に仲介してもらう	0	0.0
その他	5	33.3
まだわからない	4	26.7
合計	15	100.0

表3-34 日本へ行くために何か準備をしていますか（複数回答）

	度数	パーセント
日本語の勉強をしている	8	53.3
日本の国について勉強している	3	20.0
日本へ行った人の話を聞いている	1	6.7
お金を貯めている	2	13.3
親と話し合っている	4	26.7
友だちと話し合っている	2	13.3
その他	0	0.0
特に何もしていない	2	13.3
合計	15	100.0

第3節 日本へ行ったことのない児童の意識

続いて日本へ行ったことのない児童たちの日本観を確認しておく。日本へ行ったことのない彼らにも日本への興味はあるようで、17人中16人が、日本へ「必ず行きたい」「どちらかといえば行ってみたい」と答えている（表3-35）。その理由は、「日本へ行けば豊かになれるから」（35.3%）や「日本の学校へ留学したいから」（23.5%）なども多く含まれているものの、やはり一番多いのは「日本は安全だから」であり、日本の治安のよさがブラジルの児童たちにとって大きな魅力になっていることが伺える（表3-36）。

日本へ実際に行く日程が具体的に決まっている児童も多く（表3-37）、そのために日本語の勉強をしている者が75.0%、貯金をしている者も62.5%いる（表3-39）。ただのあこがれではなく、具体的な目的として日本行きは意識されているようである。ただし、日本への過剰な期待があるわけでもないようであり、日本へ行ったことのある人をみても羨ましいと思う人は余りいない（表3-40）。日本へ行くことのメリットも、あくまでも日本語が話せることへの評価に偏っており、先にみた治

表3-35 日本へ行ってみたいと思いますか

	度数	パーセント
必ず行きたい	13	76.5
どちらかといえば行ってみたい	3	17.6
余り行きたくない	1	5.9
絶対に行きたくない	0	0.0
合計	17	100.0

表3-36 それはなぜですか（複数回答）

	度数	パーセント
日本に行けば豊かになれるから	6	35.3
日本の学校へ留学したいから	4	23.5
親戚が日本へ行っているから	4	23.5
日本でお金持ちになった人を知っているから	3	17.6
日本は安全だから	10	58.8
日本の企業に就職したいから	3	17.6
日本へ行っても豊かにはなれないから	2	11.8
ブラジルで進学したいから	2	11.8
日本に知り合いがないから	1	5.9
日本へ行った人の評判がよくないから	0	0.0
日本は危険だから	0	0.0
ブラジルで就職したいから	0	0.0
ブラジルが好きだから	4	23.5
その他	2	11.8
特に理由はない	1	5.9
合計	17	100.0

表3-37 日本へ行く時期は決まっていますか

	度数	パーセント
決まっている	5	31.3
決まっていない	11	68.8
合計	16	100.0

表3-38 どのように行くつもりですか（複数回答）

	度数	パーセント
家族と一緒に	4	26.7
友だちと一緒に	5	33.3
デカセギの会社に仲介してもらって	0	0.0
その他	6	40.0
まだわからない	2	13.3
合計	15	100.0

表3-39 日本へ行くために何か準備をしていますか（複数回答）

	度数	パーセント
日本語の勉強をしている	12	75.0
日本の国について勉強している	5	31.3
日本へ行った人の話を聞いている	2	12.5
お金を貯めている	10	62.5
親と話し合っている	5	31.3
友だちと話し合っている	6	37.5
その他	0	0.0
特に何もしていない	2	12.5
合計	16	100.0

表3-40 日本へ行ったことのある人をみてどう思いますか

	度数	パーセント
羨ましいと思う	0	0.0
どちらかといえば羨ましいと思う	3	17.6
あまり羨ましくない	4	23.5
全く羨ましくない	10	58.8
合計	17	100.0

表3-41 それはなぜですか（複数回答）

	度数	パーセント
外国に行けたから	2	11.8
日本語が話せるようになるから	7	41.2
日本企業に就職しやすくなるから	1	5.9
お金持ちになれるから	3	17.6
国際的な視野を身につけられるから	3	17.6
ポルトガル語が苦手になるから	1	5.9
ブラジルでの進学に不利になるから	0	0.0
ブラジルでの就職に不利になるから	0	0.0
日本へ行ってもお金持ちになれないから	1	5.9
日本に魅力を感じないから	0	0.0
その他	1	5.9
特に理由はない	5	29.4
合計	17	100.0

安面のほかは、自己研鑽の一環として日本行きを考えている側面が大きいようである（表3-41）。

第4節 まとめ

児童の意識をみてきてわかったことは、親世代よりも高い日本への関心である。日本経験の有無にかかわらず、日本への評価は概して高い。また、父母の目がブラジル国内や、進学に関しては日

本よりもアメリカへと向いているのに対し、子どもたちはブラジルで進学した後に日本で就職するという理想を描く傾向にある。そして、この傾向は実際に日本へ行ったことのある者、日本で生まれた者において、さらに強くなっている。

また、日本へ行ったことのない者であっても、日本へ行ってみたいという思いは強いようである。多くの児童が、必ず日本へ行ってみたいという意識を持ち、実際に何人かの児童は日本へ行くための準備を着々と進めていた。日本へ行ったことがあるかどうかによって意識の現れ方は異なっているが、日本へ行くことを現実的に考えているという点では共通している。

ただし、児童たちが日本を向いている理由は、日本へ行くことでお金が稼げるからというよりは、日本の治安の良さを反映してのものである。日本という国自体への魅力よりは、悪化しているといわれるブラジルの治安を懸念したものであるといえる。

第4章 デカセギと教育に対する日系人学校教師の意識

第1節 教師の背景

日系人学校調査の最後に、教師のデカセギと教育に対する意識を確認することにする。まず、教師たちの背景を確認した上で、教育観とデカセギ観をそれぞれみていくことにしよう。

調査に協力してくださった教師は16人で、全員が女性である。年齢は20代から50代まで幅広く、最年少者が25歳、最年長者が56歳である。日系2世が2人、日系3世が5人いるが、6人は日系人ではない（表4-2）。11人はサンパウロ市内で生まれ育ったようである。日本で生まれたのは2人であった（表4-3）。

教師たちの学歴は大学が最も多く、68.8%を占めている（表4-4）。大学院まで行った者は3人である。世帯収入（月収）は、1人だけひとときわ収入の高い教師がいる他は、概ね1,000RLから5,000RLの範囲であった（表4-5）。教師として日系人学校を職場に選んだ理由をみると、勤務条件と教育方針がそれぞれ62.5%の教師に挙げられているように大きな理由となっている（表4-6）。日系の学校であることを理由に挙げる者は25.0%しかいなかった。

表4-1 年齢

	度数	パーセント
20代	3	18.8
30代	6	37.5
40代	5	31.3
50代	2	12.5
合計	16	100.0

表4-2 あなたは日系人ですか

	度数	パーセント
日系2世	2	13.3
日系3世	5	33.3
その他	2	13.3
日系人ではない	6	40.0
合計	15	100.0

表4-3 生まれた場所

	度数	パーセント
サンパウロ市内	11	68.8
サンパウロ近郊	2	12.5
ブラジル国内	1	6.3
日本	2	12.5
合計	16	100.0

表4-4 学歴

	度数	パーセント
専門学校	1	6.3
大学	11	68.8
大学院	3	18.8
その他	1	6.3
合計	16	100.0

表4-5 世帯年収

	度数	パーセント
1000～3000RL	5	35.7
3000～5000RL	8	57.1
12500～15000RL	1	7.1
合計	14	100.0

表4-6 今の学校に勤務された理由を教えてください(複数回答)

	度数	パーセント
教育に携わりたかった	15	93.8
これまでの経験が生かせる仕事だから	4	25.0
人にすすめられたから	3	18.8
日系の学校だから	4	25.0
勤務条件がよかったから	10	62.5
教育方針が気に入ったから	10	62.5
その他	1	6.3
合計	16	100.0

表4-7 日本に行ったり滞在したりしたことがありますか

	度数	パーセント
住んでいたことがある	5	31.3
訪日したことがある	6	37.5
訪日したことはない	5	31.3
合計	16	100.0

表4-8 日本語能力：会話

	度数	パーセント
流暢に話せる	3	18.8
かなり話せる	3	18.8
簡単な内容なら話せる	2	12.5
ほとんど話せない	1	6.3
担当外	7	43.8
合計	16	100.0

表4-9 日本語能力：読む

	度数	パーセント
新聞が読める	2	13.3
簡単な雑誌が読める	2	13.3
簡単な内容なら読める	4	26.7
ほとんど読めない	0	0.0
担当外	7	46.7
合計	15	100.0

表4-10 日本語能力：聞く

	度数	パーセント
ニュースがわかる	4	25.0
日常生活の話題がわかる	3	18.8
基本的なことならわかる	2	12.5
ほとんどわからない	0	0.0
担当外	7	43.8
合計	16	100.0

表4-11 日本語能力：書く

	度数	パーセント
どんな文章でも書ける	3	18.8
簡単なメモが書ける	6	37.5
文字がいくつか書ける	1	6.3
何も書けない	0	0.0
担当外	6	37.5
合計	16	100.0

教師自身の日本経験は、実際に住んだことのある者が5人、日本へ行ったことのある者が6人と、約3分の2が日本を経験している（表4-7）。日本語の能力は、担当者の間では概して高く、基礎的な能力は身につけていると考えられる（表4-8～11）。

第2節 教師の教育意識

教師たちの教育意識と教育実践をみてみよう。まず、彼女らの教育意識を確認してみると、子どもにとって大切だと思うことではどの項目もその重要性が高く評価されているなかで、特に「基本的なしつけをすること」と「音楽や絵画などの芸術にふれること」の2項目で平均スコアが4.94と高くなってきている（表4-12）。基礎学力も4.69と重要性を認識していることが見て取れるが、それよりも友人と遊ぶことや人の話を聞くことなどといった、情操教育に関連すると考えられる項目の方が、よりその重要性を認識されていることがわかる。

では学校教育にとって重要なことは何であると認識されているのであろうか。最も重視されているのは「教師のレベルがよいこと」であり、次いで「様々な経験をすること」や「基本的な生活習慣を身につけさせること」が、とても重要なこととして認識されている（表4-13）。「のびのびと自由な教育」については、2点をつけている教師も3人おり、賛否がややわかれている。また、「レベルの高い大学への進学」については、中間値である3点をつける者が10人と多く、評価をくだしづらいものとなっているようである。

表4-12 子どもにとって次の項目はどの程度大切でしょうか

	とても重要		まったく重要でない			平均スコア	合計
	5	4	3	2	1		
基本的なしつけをすること	15	1	0	0	0	4.94	16
自由にのびのびさせること	6	6	1	0	0	4.13	16
自分の意見を言うようにすること	11	4	0	1	0	4.56	16
文字や数の基礎を勉強すること	12	3	1	0	0	4.69	16
友だちとたくさん遊ぶこと	14	2	0	0	0	4.88	16
人の話を聞けるようになること	14	2	0	0	0	4.88	16
自然とのふれあい	13	3	0	0	0	4.81	16
好き嫌いなしで食べる	8	7	1	0	0	4.44	16
音楽や絵画などの芸術にふれること	15	1	0	0	0	4.94	16
規則正しい生活をする	9	7	0	0	0	4.56	16

表4-13 学校において以下の項目はどの程度重要だと思いますか

	ととも重要					全く重要でない					平均スコア	合計
	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1		
教育の内容がよいこと	8	6	1	1	0						4.31	16
教師のレベルがよいこと	14	2	0	0	0						4.88	16
施設の設備がよいこと	9	5	2	0	0						4.44	16
基本的な生活習慣を身につけさせる	13	1	2	0	0						4.69	16
のびのびと自由な教育	8	2	3	3	0						3.94	16
挨拶や礼儀などのマナー	10	2	4	0	0						4.38	16
さまざまな経験をさせる	13	3	0	0	0						4.81	16
レベルの高い大学への進学	4	1	10	1	0						3.50	16

そのような学校教育の重要性への認識を踏まえた上で、〇校の特徴をどのように捉えているのかを確認しておきたい（表4-14）。やはり日系人学校ということもあってか、「日本語を身につけられる」（4.31）ことと「日本の文化が身につく」（4.73）の2点が大きな特徴として認識されている。また、「基本的な礼儀が身につく」（4.50）ことも評価されており、しつけを重視する教師たちの意識によってこのような実践が実行に移されていることを示している。

表4-14 この学校の特徴をどのように思いますか

	そう思う					全く思わない					平均スコア	合計
	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1		
日本語を身につけられる	8	5	3	0	0						4.31	16
日本語で学ぶので日系人には理解しやすい	1	1	7	4	1						2.79	14
日本の文化を身につけられる	11	4	0	0	0						4.73	15
学力レベルが高い	4	4	4	1	0						3.85	13
将来の就職に有利	3	6	4	2	0						3.67	15
基本的な礼儀が身につく	10	4	2	0	0						4.50	16

日本とブラジルの教育の仕方については、75.0%の教師がその違いを感じており、「あまり違わない」「全く違わない」という者は1人もいなかった（表4-15）。そのようななかで、日頃の教育実践において日伯両国の文化を伝えていく必要性を全員が感じている（表4-16, 17）。ブラジルという自国の文化を知ることの必要性を強く感じつつ、日本の文化のよさも認識していること、そして、一つの文化に縛られてしまうことへの危機感が、両国の文化をともに吸収していく必要性という意識に表れているようである。

ただし、日本の文化を実際に子どもへ伝達する場面は、ある程度授業内に限られているようである（表4-20）。授業以外の時間に日本の文化を取り入れた指導をすることがあるかどうかを聞くと、「よくある」「時々ある」と答えた者は合わせて7人と、半数に満たなかった。

表4-15 日本の教育の仕方とブラジルの教育の仕方に違いがあると思いますか

	度数	パーセント
とても違う	10	62.5
多少違う	2	12.5
あまり違わない	0	0.0
まったく違わない	0	0.0
わからない	4	25.0
合計	16	100.0

表4-16 日常の教育活動の中で日本の文化を伝えていく必要性を感じますか

	度数	パーセント
とても必要だと思う	5	31.3
多少必要だと思う	11	68.8
あまり必要ない	0	0.0
まったく必要ない	0	0.0
合計	16	100.0

表4-17 日常の教育活動の中で、ブラジルの文化を伝えていく必要性を感じますか

	度数	パーセント
とてもそう思う	7	43.8
多少そう思う	9	56.3
あまり思わない	0	0.0
まったく思わない	0	0.0
合計	16	100.0

表4-18 (日本の文化を伝える必要性に関して) なぜそう思いますか (複数回答)

	度数	パーセント
ここが日系人学校だから	4	25.0
日本の文化のよさがあるから	14	87.5
国際理解のため	11	68.8
自国の文化を知っていればよいから	0	0.0
その他	0	0.0
合計	16	100.0

表4-19 (ブラジルの文化を伝える必要性に関して) なぜそう思いますか (複数回答)

	度数	パーセント
家庭だけでは身につかないこともあるから	5	31.3
自国の文化を知ることは大切だから	6	37.5
あえて教える必要はない	0	0.0
自国の文化にとらわれないほうがよいから	11	68.8
その他	2	12.5
合計	16	100.0

表4-20 あなたは授業で決められた時間以外に日本の文化を取り入れることがありますか

	度数	パーセント
よくある	1	6.3
時々ある	6	37.5
あまりない	4	25.0
まったくない	5	31.3
合計	16	100.0

デカセギ児童と接した経験をみてみると、62.5%の教師が実際にデカセギ帰りの子どもを受け持ったことがあり(表4-21)、そのうちの72.7%にあたる8人は現在勤務している学校で担当している(表4-23)。実際に関わった帰国児童の数はさして多くはなく、多くても9~10人程度である(表4-22)。担当した学年も多様であり、幼児クラスから5~8学年の高学年クラスまでまんべんなく経験している(表4-24)。

では、実際に帰国児童を受け持ったことのある教師たちの目に、帰国児童はどのように映ったのだろうか。多くの教師が認識している帰国児童の特徴は、「ポルトガル語が話せない」と、「学力が遅れている」である(表4-25)。また、複数の国を股にかける、あるいは自国以外の学校へ通うことで国際的な視野が養われると期待する親や子どもは多いが、実際に帰国児童がそのような視野を

持っていると感じている教師はさほど多くなく、「国際的な視野を持つ子が多い」に、5点（「多かった」）をつけた教師は1人もいなかった。

特に言語の問題は大きいようであり、帰国児童の使用言語では「日本語と少しのポルトガル語」と答えた教師が7人、「日本語」と答えた教師が2人と、ポルトガル語よりも日本語側に大きく偏った言語能力を持っていることを予想させる結果がでている（表4-26）。

このような状況下で教師たちは様々な配慮を帰国児童たちに行っている。懸念の言語面と学力遅滞に対しては特に配慮している教師が多くなっており、それらはよい結果に結びついていると高く自己評価している（表4-27, 28）。言語面における配慮の一環として子どもたちに日本語で話しかけるようにしている教師も半数近くいる（表4-29）。日本語は説明を要する場面のほか、ほめるときや注意を促すとき、慰めるときなど、様々な場面で使用されている（表4-30）。

なお、帰国児童たちにブラジルと違った文化がしやすい場面としては自分の意見を述べる時が最も多く挙げられている（表4-31）。ただし、それ以外では「食の好み」や「絵画や造形」、「リズム遊びやお遊戯」などが多少目立つ程度であり、文化の違いが認識される場面は少ないようである。子どもたち自身の自己認識でも、多くの児童は自分はブラジル人であることを認識していると感じているようである（表4-32）。

最後に、デカセギ帰国児童の保護者に対する認識を聞いてみると、「とても協力的な人が多い」という者は1人もいないが、63.6%は「まあ協力的な人が多い」と答えており、それなりに良好な関係が築けているようである（表4-33）。

表4-21 デカセギで日本から帰国した子どもを受け持ったりかかわったことがありますか

	度数	パーセント
受け持ったことがある	10	62.5
受け持ちではないがかかわった	1	6.3
そのような経験はない	5	31.3
合計	16	100.0

表4-22 今まで何人くらいのデカセギ帰国児童とかかわりもちましたか

	度数	パーセント
1～2人	4	36.4
3～4人	3	27.3
5～6人	3	27.3
7～8人	0	0.0
9～10人	1	9.1
合計	11	100.0

表4-23 それは現在勤務している学校ですか

	度数	パーセント
はい	8	72.7
いいえ	3	27.3
合計	11	100.0

表4-24 その児童の学年はどの学年でしたか

	度数	パーセント
幼児クラス	2	18.2
1～2学年	6	54.5
3～4学年	1	9.1
5～8学年	5	45.5
合計	11	100.0

表4-25 日本から帰国した子どもたちの特徴について

	多かった					全くない		平均スコア	合計
	5	4	3	2	1				
ポルトガル語を話せない子が多い	4	2	4	0	1	3.73	11		
ポルトガル語が下手な子が多い	3	1	5	0	2	3.27	11		
学力が遅れている子が多い	2	5	3	0	1	3.64	11		
ブラジル文化になじめない子が多い	1	1	5	2	2	2.73	11		
消極的な子が多い	0	1	4	5	1	2.45	11		
礼儀がしつけられていない子が多い	1	3	1	2	4	2.55	11		
国際的な視野を持つ子が多い	0	3	2	3	3	2.45	11		
特に何の心配もない	1	1	4	2	2	2.70	11		

表4-26 日本から帰国した子どもたちが使用している言語は何語が多いですか

	度数	パーセント
ポルトガル語	0	0.0
ポルトガル語と少しの日本語	1	10.0
日本語と少しのポルトガル語	7	70.0
日本語	2	20.0
合計	10	100.0

表4-27 帰国した子どもたちに対してどの様なことを心がけましたか

	度数	パーセント
言葉の面で配慮した	9	81.8
ブラジルの文化について教えた	6	54.5
勉強の遅れを取り戻すよう配慮した	5	45.5
友だちができるよう配慮した	5	45.5
自信を持たせるよう心がけた	7	63.6
その他	2	18.2
合計	11	100.0

表4-28 配慮したことにより子どもに何か変化はありましたか

	度数	パーセント
よい結果につながった	3	27.3
多少よい結果につながった	8	72.7
あまり変化はなかった	0	0.0
まったく変化はなかった	0	0.0
合計	11	100.0

表4-29 帰国した子どもに話しかける際、日本語を使用することがありますか

	度数	パーセント
よくある	3	27.3
時々ある	2	18.2
あまりない	2	18.2
まったくない	4	36.4
合計	11	100.0

表4-30 日本語を使うのはどのような場面で使用されることが多いですか (複数回答)

	度数	パーセント
ほめるとき	3	60.0
注意を促すとき	3	60.0
説明するとき	5	100.0
なぐさめるとき	3	60.0
その他	0	0.0
合計	5	100.0

表4-31 ブラジルとは違った文化が出やすいのはどのような場面ですか

	多かった					全くない					平均スコア	合計
	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1		
服装	1	0	4	2	4						2.27	11
食の好み	2	3	4	0	1						3.50	10
スポーツ	0	0	7	2	0						2.78	9
絵画や造形	1	3	4	1	1						3.20	10
リズム遊びやお遊戯	0	4	4	2	0						3.20	10
自由遊び	0	3	5	2	0						3.10	10
子ども同士のけんか	0	2	2	5	2						2.36	11
自分の意見を述べる時	5	2	2	2	0						3.91	11

表4-32 子どもたちは自分がブラジル人ということを意識していると思いますか

	度数	パーセント
意識している	2	18.2
多少意識している	5	45.5
あまり意識していない	3	27.3
まったく意識していない	1	9.1
合計	11	100.0

表4-33 帰国した子どもの保護者はお子さんの教育に協力的でしたか

	度数	パーセント
とても協力的な人が多い	0	0.0
まあ協力的な人が多い	7	63.6
あまり協力的でない人が多い	1	9.1
まったく協力的でない人が多い	2	18.2
その人によるのでわからない	1	9.1
合計	11	100.0

第3節 教師のデカセギ観

最後に、教師のデカセギに対する意識を確認しておく。なお、教師の周辺のデカセギ状況は、親戚が行ったことがあるという者が62.5%いるほか、2人を除いては周囲の誰かしらがデカセギに行っている（表4-34）。教師たちにとっても、デカセギというのは決して他人事ではなく、身近な経験であるといえる。そのようなこともあってか、日系人がデカセギに行くことに対しては、「余り好ましくない」と答える者が1人いるだけで、悪いことであるとは考えられていない（表4-35）。かといって積極的に見ているわけでもなく、父母調査と同様に「仕方がない」と考えている者が73.3%と最も多くなっている。デカセギに対する意識の理由では、「生活のためには仕方がない」が53.3%と多くなっているほか、「日系人が祖国に行くのは当然だから」という理由を挙げる者が40.0%いる点が特徴的である（表4-36）。

マクロな視点でデカセギを捉えている者は余りおらず、経済や社会の活性化を挙げる者はほとんどいない（表4-37）。また、デカセギがブラジル経済に良い影響を与えているかどうかを聞いても、「多少与えている」と答える者が64.3%と多くなっているものの、「与えている」と明言する者は1人もいなかった。

家族でデカセギに行く点については、父母の意識と同様に「家族一緒ならよい経験だ」と考えている者が60.0%と多い（表4-38）。親子が別かれて暮らすことを忌避する傾向もまた、父母と共通している。

表4-39をみても、デカセギで子どもを日本に連れて行くことについて、「子どものアイデンティ

ティが確立しない」(3.40)、「ブラジルに帰国したときに難しい」(3.93)などの懸念点を多くの教師が挙げつつも、「家族が離れて生活するよりはよい」に対し、12人が「そう思う」(5点)と答えているなど、親子一緒にいることの意義を見いだそうとしている。また、先にみたように国際的な視野に関しては懐疑的な意見が多かったものの、それ以外で、例えば「日系人にとって日本を知るよい機会だ」(4.38)、「日本語を身につけられてよい」(4.44)などの意見に賛同する教員が多く、数々の懸念点を抱えつつも、デカセギの教育的効果を見だし、それをサポートしていこうとする教師の姿がこの調査からは描き出される。

表4-34 あなたの周辺でデカセギに行った人はいますか(複数回答)

	度数	パーセント
親戚が行ったことがある	10	62.5
友人がいったことがある	9	56.3
知人が行ったことを聞いた	10	62.5
人から話を聞く程度	2	12.5
そのような話を聞いたこともない	0	0.0
合計	16	100.0

表4-35 日系人がデカセギに行くことについてどのように思いますか

	度数	パーセント
どんどん行くべき	3	20.0
仕方がない	11	73.3
あまり好ましくない	1	6.7
行くべきでない	0	0.0
合計	15	100.0

表4-36 その理由(複数回答)

	度数	パーセント
ブラジル経済が活性化するから	2	13.3
ブラジル社会が活性化するから	0	0.0
生活のために仕方がない	8	53.3
日系人が祖国に行くのは当然だから	6	40.0
日本の文化を知ることができるから	6	40.0
ブラジル人はブラジルで仕事をすべきだから	1	6.7
子どもの教育に影響があるから	2	13.3
ブラジル経済が停滞するから	0	0.0
ブラジル社会が停滞するから	0	0.0
特に理由はない	0	0.0
その他	0	0.0
合計	15	100.0

表4-37 日本へのデカセギはブラジル経済により影響を与えていると思いますか

	度数	パーセント
与えている	0	0.0
多少与えている	9	64.3
あまり与えていない	5	35.7
まったく与えていない	0	0.0
合計	14	100.0

表4-38 家族でデカセギに行くことについてどう思いますか

	度数	パーセント
家族一緒ならよい経験だ	9	60.0
親だけで行く方がよい	0	0.0
どちらともいえない	6	40.0
合計	15	100.0

表4-39 デカセギで子どもを日本に連れて行くことについてどう思いますか

	そう思う					全く思わない					平均スコア	合計
	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1		
子どもの年齢が低ければ問題ない	3	3	3	2	4						2.93	15
日系人にとって日本を知るよい機会だ	10	3	2	1	0						4.38	16
日本語を身につけられてよい	10	3	3	0	0						4.44	16
日本は治安がよいので子連れでも安心だ	6	3	4	0	0						4.15	16
家族が離れて生活するよりはよい	12	3	1	0	0						4.69	16
将来ブラジルでの進学に不利になる	0	1	6	2	5						2.21	14
将来ブラジルでの就職に不利になる	0	5	3	1	5						2.57	14
ブラジルに帰国したときが難しいと思う	5	4	6	0	0						3.93	15
子どものアイデンティティが確立しないと思う	2	5	6	1	1						3.40	15
日本にいても母国の教育を心がければ問題ない	0	5	2	5	3						2.60	15

第4節 まとめ

教師は、デカセギ帰国児童たちに語学と学力での課題があることを認識しつつ、多くの配慮をすることで自らの教育に手応えを感じている。教育に関してはしつけや礼儀を中心とする全人格的教育を重視した実践を目指している。

教師の多くはデカセギを、生活のために仕方のないことと捉えている。しかし、それをただ仕方のないこととして諦めるのではなく、家族が離れることだけは拒絶するものの、日本を知る、日本語を身につけるなどの積極的な意味付けをすることによって活用しようと考えている様子がうかがえる。

また、父母調査との比較でいえば、父母の多くは日本へ行くことで子どもの国際的な視野が広がることを期待している。これは、日本で行った日本人や在日ブラジル人への調査でも多く見受けられる言説である。しかし、実際にデカセギから帰国した児童を受け持った教師たちの評価では、国際的な視野の広がりには期待されていない。

注

- 1) ニッケイ新聞2001年12月21日号。http://www.brazil.ne.jp/sociedade/news/168.htmlより引用。
- 2) 住んだことがないにもかかわらず、日本で学校に通った経験のある者が2人いるが、彼らの日本へ行った目的をみると、交換留学となっていた。このことから、短期留学あるいは短期研修のような形で学校へ通っていたと考えられる。そのため、「住んでいた」という実感にながっていないのであろう。